

機関番号：21401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年～2010 年

課題番号：205304 67

研究課題名（和文）巨大干拓事業による潟湖コモنزの崩壊と再生に関する環境社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Study on the Destruction and Rebirth of Lagoon Commons by a Great Reclamation Project

研究代表者

谷口 吉光（TANIGUCHI YOSHIMITSU）

秋田県立大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：6 0 2 2 2 1 2 1

研究成果の概要（和文）：

本研究は、八郎潟干拓による伝統的な潟湖コモنزの崩壊と再生過程を記述し、潟湖コモنز再生の方向性を検討することを目的とする。主な成果は次の通り。(1) 干拓以後の周辺住民の生活変化を考察、(2) 干拓によって八郎潟の自然資源の利用の変化を琵琶湖との比較において考察、(3) 住民の八郎湖に対する意識をアンケート調査によって分析、(4) 住民による八郎湖の自然再生活動の現状と課題を検討、(5) 今後の潟湖コモنزの再生の展望と課題を検討した。

研究成果の概要（英文）：

The lagoon commons in Hachirogata Lagoon in Akita, Japan was destroyed heavily by the reclamation project in the 1960s, but it is now in the rebirth process by recent citizen activities. This research aims to describe the destruction and rebirth process of the lagoon commons in Hachirogata, and to discuss the future perspective. Major results of this research are: (1) research on change in life of the local people after the reclamation; (2) research on change in the use of local resources after the reclamation, (3) survey research on people's consciousness of the lagoon; (4) research on citizen environmental activities for the rebirth of the commons; (5) concluding discussion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：地域開発、環境再生、コモنز、潟湖、干拓、八郎潟、八郎湖

1. 研究開始当初の背景

(1) 八郎潟干拓によって、秋田県八郎潟は未曾有の環境改変を蒙り、住民と干拓以前の八郎潟の間に構築されてきた伝統的な環境利用・管理システム（潟湖コモنز）は干拓によって急速に崩壊した。また残された湖（八郎湖）の浄化力は大幅に低下し、富栄養化に

よる水質悪化や湖内生態系の貧困化などの環境悪化が深刻化してきた。

(2) しかし、2000 年代から地域住民による八郎湖再生の活動が活発化し、2007 年の湖沼水質保全特別措置法の指定を受け、秋田県も八郎湖水質改善のための新たな施策に取り

組み始めた。このように八郎湖の再生は新たな段階を迎え、潟湖コモンズ再生の機運が盛り上がっている。

(3) しかし、これまで八郎潟干拓の地域社会への影響を研究した社会学的研究はほとんどなかった。干拓から40年が経過し、ようやく湖沼法指定や住民参加によって地域再生が盛り上がりを見せる現在、この問題を「潟湖コモンズの崩壊と再生」という視点から社会的に研究することは環境社会学に貴重な知見を提供するだけでなく、現場の政策立案や住民活動に重要な示唆を提供するものであると考える。

2. 研究の目的

(1) 巨大干拓事業による八郎潟の潟湖コモンズの崩壊過程の分析。八郎潟干拓によって八郎潟の潟湖コモンズがどのように崩壊したか。特に漁業、資源利用、生活、意識、信仰の視点から検討する。具体的には、
- 干拓以後の周辺住民の潟湖環境利用、生活意識・環境意識の変化
- 干拓以後の漁業信仰（八郎太郎信仰）の変化
- 現在の周辺住民の八郎潟に対する意識と環境利用実態調査（アンケート調査）

(2) 八郎潟の潟湖コモンズの再生活動の現状と課題。住民による潟湖コモンズ再生活動の現状を調査し、今後の方向性を検討する。具体的には、
- 干拓以後の八郎湖の自然環境悪化（水質、動植物など）
- 行政による八郎潟の環境保全政策の効果と限界
- 住民による潟湖の自然再生活動の現状と課題

(3) 総合考察：潟湖コモンズ再生の可能性と課題

3. 研究の方法

(1) 干拓以前の八郎潟の環境利用の分析については、主として文献調査によって、漁業・生活などの面から調査する。

(2) 干拓事業による潟湖コモンズの崩壊過程の分析については、文献調査と地域住民への聞き取り調査を平行して実施する。

(3) 住民アンケート調査については、1000票程度のサンプルによる調査を実施する。

(4) 八郎潟の潟湖コモンズの再生活動の現状と課題については、主として活動している諸団体・行政等への聞き取り調査を行う。

(5) 研究補助員を雇用し、必要に応じて文献収集や調査補助を行う。

(6) 年2回程度、全体研究会を開催し、各自の調査報告を行う。

4. 研究成果

(1) 聞き取りは、八郎潟と密接な関係を持つ湖岸の漁師、販売・行商の経験者を中心に、2008年11月～2009年8月にかけて断続的に10名を対象者（インフォーマント）として実施し、主に干拓前後の生活と地域社会の変化について聞いた。その結果、八郎潟干拓事業以降、住民と八郎潟の間の資源利用の共同体的慣行は崩壊した。

漁業面では、漁業者数・漁獲高の激減、淡水化による魚種の減少、魚貝類の地域内流通の崩壊、ガンガン部隊など行商の消滅などが特徴となる。

資源利用では、各種注水植物（ヨシなど）、沈水植物（コアマモなど）、魚貝類のおかずとり、小魚の佃煮など生活に密着した水辺の資源利用の激減が見られた。

八郎潟の魚貝類を食べる食文化の衰退。かつてはシジミ、フナ、ワカサギ、シラウオなどを食べる食文化が存在したが、それは潟の時代を知る高齢者以外ではほぼ消滅した。

子どもの生活面では、水辺で遊んだり泳いだりする八郎潟時代の習慣の消滅。現在の八郎湖はコンクリート湖岸で固められており、危険なので近づかないように小学校等でも指導されている。そのたえ八郎湖に行く子どもは少ない。

信仰面では、八郎湖の伝わる自然信仰「八郎太郎信仰」に関する30数カ所の祀跡の調査を行ったが、数の減少や無関係な神社へ移動されたもの、放棄されたものなどが多数発見され、自然信仰の衰退の実態を明らかにした。また干拓以前に存在していた八郎講も現在は1個所が残るのみである。

(2) 現在の周辺住民の八郎湖に対する意識と資源利用を知るためのアンケート調査を実施した。アンケートは2011年1月に八郎湖流域全市町村の住民を対象に1000票を抽出して行った（回収513票、回収率51.3%）。

その結果、現在でも八郎湖に足を運ぶ住民が一定数存在するが、その目的は漁業ではなく、ジョギング、写真撮影など多面的なレクリエーションである。

八郎湖の魚貝類を今でも食べる食生活はかなり残っている。

「あなたは今、八郎湖でとれる魚や貝を食べますか」という質問に対して、「よく食べる」という回答が6.5%、「たまに食べる」が42.0%で合計するとほぼ半数が八郎湖の魚貝類を食べる習慣を持っていることが明らかになった。これは聞き取り調査の結果を覆すものである。

八郎湖の環境に関心を持つ住民も相当数存在する。「あなたは八郎湖の水質や環境に関心がありますか」という問いに対して、「とても関心がある」26.4%、「ある程度関心がある」37.9%と、合計64.3%が「関心がある」と回答した。

八郎湖に対する愛着については、「あなたは八郎湖を身近に感じますか」という問いに対して、「とてもそう思う」35.4%、「ややそう思う」28.0%と、合計63.4%が「八郎湖を身近に感じる」と答えた。また「あなたは八郎湖が好きですか」という問いに対しては、「とてもそう思う」29.9%、「ややそう思う」27.8%と、合計57.7%が「八郎湖が好き」と答えた。これは予想を大きく上回った。

住民が干拓の是非についてどう考えているかを知るために、「あなたは八郎湖干拓は潟上市や周辺地域の発展にプラスだったと思いますか」という質問をしたところ、「とてもプラスだった」5.6%、「ある程度プラスだった」16.3%、「どちらともいえない」25.2%、「むしろマイナスだった」23.7%、「非常にマイナスだった」7.7%と意見が分かれた。市町村別に見ると、「とてもプラスだった」と「ある程度プラスだった」が高かったのは大潟村61.5%、能代市が40.0%、八郎潟町22.4%であった。これに対し、「むしろマイナスだった」と「非常にマイナスだった」の回答率が高かったのは、秋田市40.0%、井川町34.2%、五城目町31.8%であった。

将来の八郎湖の資源利用の希望について聞いたところ、その結果「フナやワカサギやシジミなど八郎湖の在来魚が増える」74.5%、「安心して潟の魚が食べられる」65.7%、「八郎湖の漁業が元気になる」41.3%、「八郎湖の魚を使った佃煮などの加工業が元気になる」36.3%など魚や漁業の復活を望む回答が多かった。やはり八郎湖は住民にとって魚を獲り、食べるというコモンズとしての意味をまだ根強く持っていることが明らかになった。

また「子どもが泳いだり水遊びができるような浅瀬がある」40.5%、「八郎湖岸でキャンプなどが楽しめる施設がある」37.4%と、水遊びや親子でのレジャーを楽しみたいとい

う回答も多かった。

これに対して回答率が低かったのは「トラックバスの釣りを楽しめるボートや釣り場が増える」9.9%、「ヨットやプレジャーボートの繫留地(ハーバー)がある」10.3%、「遊覧船に乗って湖上観光ができるようになる」16.0%であった。

八郎湖の利用については、回答者の多くが在来魚の増加や安心して潟の魚が食べられること、八郎湖で遊べることなどかつての八郎湖の利用法に近づけることを希望する回答の割合が高い。反対に、バス釣りをしたり、ヨット・プレジャーボートなどを利用するなど、近代的な余暇的な利用法を希望する割合は低かった。

以上、住民意識を見ると、八郎湖とのつながりが決して消滅したわけではなく、また関心を失ったわけではなく、潜在的な八郎湖への関心や愛着はかなり高い。将来の働きかけによって、八郎湖再生の担い手が地域から広く生まれてくる素地があることを確認できた。

(3) 八郎湖の潟湖コモンズの再生活動については、谷口が再生活動を行う住民団体に参与観察を続けてきたので、その考察を中心にまとめた。

比較的少数の先駆的住民団体が長年の環境活動を実践してきた。

2004年から始まった秋田県秋田地域振興局による八郎湖再生活動の支援事業が住民の活動と相まって周辺住民に八郎湖の再生の意義と可能性を幅広く知らせることになった。

最近では住民団体のネットワーク組織が結成され、またNPO法人が結成されるなど八郎湖再生の住民団体は点から線、線から面へと拡大している。

しかし、こうした動きが湖の資源利用と共同体的慣行の再生につながるのかどうかは現時点では不明確である。

(4) 結論として、巨大干拓事業によって破壊された潟湖コモンズは、干拓後50年の水質改善と生態系破壊に苦しんだ後、地域住民が主導する運動によって再生の可能性を示し始めた。今後は秋田県や周辺市町村との連携を踏まえながら、より着実に広範な取り組みに展開していくことが望まれる。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計2件)

谷口吉光、「八郎湖再生新時代」に向けて、
雪国環境研究、2009、2-11.

小松田儀貞、八郎瀧 - 「期待と回想」の間で
-、秋田県立大学総合科学研究彙報、VOL.11、
2010、5-16.

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕

その他の論文：谷口吉光、八郎湖の再生をめ
ざす活動：多様な団体が専門性を活かして協
働、秋田県 協働のモデル集、2011、46-47.

その他の論文：谷口吉光、八郎湖再生新時代、
第3回八郎湖の再生を考える集い報告書、
2010、28-40.

その他の論文：谷口吉光、「八郎湖の再生」
をめざす住民の取り組み、全国合成洗剤追放
第30回全国集会資料集、2008、39-42.

その他の論文：谷口吉光、八郎湖の水質悪化
問題について、全国合成洗剤追放第30回全
国集会資料集、2008、3.

その他の論文：谷口吉光、解説、天野荘平・
谷口吉光「八郎瀧と八郎太郎：八郎太郎信仰
と伝説の地を訪ねて」、2010、56-60.

公開講座および講演：谷口吉光、八郎湖の環
境問題と再生：環境社会学の視点から、秋田
県高大連携講座、2010.11.18 ほか多数

報道関連：秋田県内新聞・テレビで報道多数

アウトリーチ活動：NPO 法人はちろうプロ
ジェクト副代表理事、環八郎湖市民ネットワ
ーク副代表、NPO 法人あきた地域資源ネット
ワーク理事、秋田県瀧上市との共同研究
「瀧上市発 八郎湖再生ビジョンの策定」
(2009.4～2010.3) 同「瀧上市版 八郎湖
環境学習プログラム策定」(2009.4～2010.3)
大瀧村版 無代かき栽培マニュアルの編集、
(2010.2.28)

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

谷口 吉光 (TANIGUCHI YOSHIMITSU)
秋田県立大学・生物資源科学部・教授
研究者番号：60222121

(2)研究分担者

小松田 儀貞 (KOMATSUDA YOSHISADA)
秋田県立大学・総合科学教育研究センター・
准教授

研究者番号：00234881

脇田 健一 (WAKITA KENICHI)

龍谷大学・社会学部・教授

研究者番号：00305319

牧野 厚史 (MAKINO ATSUSHI)

滋賀県立琵琶湖博物館・主任学芸員

研究者番号：10359268